

34、(沙石集による)

ある山寺に修行者が集まっていた、その中の一人の修行者が「私は生まれて以来、まったく腹が立った事がない」と言うと、世の中を離れて修行する優れた僧が、

「聖者でない限り、普通の人には、欲と怒りと愚かという三つの毒がある。程度はあっても、少しはこの三毒があるだろう。」と言ったら、その修行者は、

「全て少しも腹が立たない。」と言い返し、その言葉に対して優れた僧が、

「本当だとは思えない、貴方の作り話だ」と言うと、

「腹が立たないと言ったら、立たないのだ。」と顔を真っ赤にして怒った。

35、(兼好法師、徒然草による)

九州に、治安を守る兵隊の長である押領使(おうりょうし)がいました。

この人は、大根が何にでも効く素晴らしい薬であるとして、長年毎朝2本つつ焼いて食べてきました。ある時、城館に兵

隊がない隙を狙って、外敵が襲ってきて、包囲しました。

兵はだれもいなければずなのに、館の中から兵が2人出てきて死にもぐるいに戦って、押し返してしまいました。

不思議に思っ「日頃ここにいらっしやる人達でないようですが、こんなに奮戦していただいたのは、どなたでしょうか？」と問いますと、「長年あなたが信頼して召し上がってください

ったダイコンでございます」と言っ姿が失せました。深く信頼していたので、功德があつたのであろう。

36、(猿著聞集による)

陸奥の仙台に住む錦織唐磨が、幼少の時ある所に行つて帰るとき、ある山里を通つた。夏の初めなので、ほととぎすの初音を聞いて、

(ほととぎすの初音を聞いてうれしいが、その声を)家へのみやげとして持つて帰れな　いのが残念です。親も待ち望んでおられた初時鳥だけに

と詠んだ。さて家に帰って、母親の前に出て、「今日はほととぎすの初音を聞きましたので、もしみやげにできるものだったなら、母上がとてもお喜びになるだろうにと思つていたけれども、(鳥の鳴き声なので) どうにもならなくてこのような歌だけを詠んで帰りました。」と申したところ、母親は(これを)聞いて、「ほととぎすの初音を聞くよりは、お前の詠んだ歌を聞くほうが、うれしい気持ちになりますよ。」とおっしゃつた。(すると)ちようどそのとき空にほととぎすが鳴いたので、母親といっしょに「あつ、鳴いたよ。」と言つたので、唐磨はすぐ、家へのみやげとなつたのはうれしいことですよ、と、上の句「家苞にならぬばかりぞ恨みなる」を(このように)直したということである。

37、(御伽草子による)

京の都で、猫の綱を解いて放しなさいというご命令が出た。

(そこで) ねずみたちが、集まっていろいろと相談をした。

「すでに都のお触れが出てから、五十日になるけれども、あぶらあげや焼き鳥のにおいのようなものでさえかいでない。

猫どのに行き会わない(ようにする)と、(我々は)自然と飢えて死んでしまうのである。」「このほど聞き及んだのは、近江の国で御検地「田畑の測量」があつたので、百姓が稲を刈らな
いとのことを、確かに聞いたのです。

ともかくも冬中は(そこへ)参りまして、稲の下に妻子たちを
しゃがませて、年を越え暖かくなったならば、わらびなどを掘
って食べ、ひとまず命をつなごうと存じます。」「何より心残り
でございますのは、まもなく正月になり、もち、せんべい、あ
られなどを食べて遊ぼうと思っていたのに、猫どのに追い立て
られ、退くことこそ残念です。」「しかしながら猫どもの、犬と
いう(より)強い者に追い回され、十字路や川端に倒れ伏して
いるのを見ると、応報というものはあるのです。」「と心を奮い
立たせながら、方々へ立ち去っていく。

その中のねずみが(次のような)歌を詠んだ。

ねずみを取る猫のうしろには(猫を狙う)犬がおり、狙う側が
(立場が変われば)狙われるということなのだなあ。

38、(建部綾足、紀行による)

陸奥の国に小坂というところがあつた。

寒い暖かいは、この峠を境にして、今まで草鞋で雪を踏みしめ
ていたのに、この峠を越えるやいなや、土が割れるほどに乾い
ていて、森の木立に春霞がたちこめ、日の光を受けた山の斜面
はたいへん暖かいからか、やまぶきの花がしきりにほころびて、
彼岸桜も今が盛りと咲いている。

はるか昔のこと、四月のはじめだつたと思うが、出羽の国から
越後の国への山越えをしたときに、このような経験をしたなあ
と、過去のことを思い出したが、わずかに風だけがおだやかな
ので、冬ごもりをしていた鳥が、急に春の空に鳥かごから放た
れたような気分がして、句も多く詠まれてくることだ。
初桜を見て、ここで春の女神である佐保姫にあつたような気が
することだなあ。

39、(曾我物語による)

昔、保昌という人が丹後の国にお下りになった。

その国に、朝妻という狩り場があった。その山の鹿は、夕方から夜に入るころに、山では過ぎさないで、渚のほうに降りて何頭もが集まって寝る。

(人びとは、)その隙に山へ勢子を入れて、夜中にとりかこみ、明け方になると、広い浜へ追い出して思いどおりに射止める。

保昌はこれを聞いて、朝妻に陣営を構え、射る役割の者を三〇〇人そろえて、勢子を山に入れて夜があけるのを今か今かと待っている、夜中のころになり、鹿の鳴き声が聞こえてきた。

ちようど、(妻の)和泉式部と一緒に連れになっていたころ、鹿の声を聞いて(和泉式部が詠むには)

もつともなことだなあ。どうして鹿が鳴かないことがあるうか。今夜までの命だと思うので。

と詠んだので、保昌はその歌に感じ入って、その日の狩りを中止になさった。その後、死んでしまった鹿のために、供養もなさったとかいうことだ。

40、(十訓抄による)

南都(奈良)に舞の師、字(あざな、通称)和博士晴遠という者がいた。

代々この職をつとめ、「還城楽(げじょうらく)」という舞いをして、お仕えもうしあげていたところ、この舞をまだほかの人(弟子たち)に教えないうちに病気で死んでしまった。

土用のころだったので、その棺を、ははその森の木の上に置いた。

こうして二三日たって、その(棺の)前をきこりが通ったら、なにかがうめくような声がしたので、不思議に思つて、

その喪家(喪中の家)に(行つて、このことを)報告したので、(晴遠の)妻子や親類が行つて見ると、彼が生き返つていたので、家に連れて帰つて、よくよく手当てをし、いたわつたので、次第に人心地がついてきたのだった。

そして助かつて(彼が)言うには、

「私が閻魔王の宮殿に行つて、(私の生前の)罪を定められる時、一人の冥官(地獄の裁判官)が申すには、

『日本の舞の師匠の晴遠は、まだ還城楽を(ほかの人に)伝えないうちに、その身を地獄に召されました。

この舞は(晴遠の死によつて)もはや日本の国において、断絶しようとしております。このたびは(現世に)帰しつかわして、還城楽を伝えさせてから(地獄に)召されるのが、よいでしょう』

と申します。そのとき、皆で議論をして

『まことに、そうあるべきだ。ついでには、このたびの常楽会

(げじょうらくえ、興福寺の涅槃会)の舞をおつとめせよ』

ということ、帰されると思ううちに、生き返つたのだ」と語つた。

親しい者どもは喜んで、「驚くべきありがたい事だ」と言った。後日、この舞を弟子に伝えてのち、彼は死んだ。

41、(伊曾保物語より)

ある川のほとりを馬に乗って通る人がいた。その傍らで、龍が水辺から離れてしまつて(衰弱して)困っていた。

この龍が、通りかかったその人を見て申し上げたことは、

「私は今、水辺を離れてしまい、どうしようもない状態です。お慈悲をおかけ下さつて、その馬に乗せて水のあるところまで連れて行っていただければ、そのお礼として、金銭を差し上げます。」といった。

その人は、本当かと思つて、馬に乗せて水辺まで連れて行つた。そこで、「約束の金銭をくれよ。」といつたら、龍は怒つて言つた。

「どうして金品を渡すのか。私を馬に括りつけて痛めつけた事さえあるのに、金品とは何事だ。」と人に挑み争っている所に、狐がやってきて、「龍殿は、どうして争っているのか」と言う

と、龍は今までのいきさつを話したところ、狐が二人に言つた。「私がこの件を判断しましょう。その馬に括りつけたというのは、どれ位だったのか」と言うと、龍は「このようだ」と言つて、また馬に乗つたので、狐は人に「どれほど締め付けたのか」と尋ねると、人は「これくらい」と括りつけたところ、龍は

「まだ、そんなものではない。かなり強く締め付けられた」と言つたので、狐は「これくらいか」と言つて、

これ以上ないくらいに締め付けて、人に言つた。

「このような道理をわきまえない悪者はもとの所へ送り返してやれ」と追い立てた。

人は「もつともだ」と喜んでもとの畑に戻してしまつた。

その時、龍は何度も後悔したけれど、どうしようもなく死んでしまつた。